学苑・英語コミュニケーション紀要　No. 822　114〜124（2009・4）

ダイコトミーとアメリカ文化

古　澤　寛　行

Dichotomy and American Culture

Hiroyuki Kozawa

Abstract

Dichotomy rests partially on the psychological drive inherent in human nature to see dualities of elements in what calls for reasoned explanations. But in America, it is more of a consequence of the culture—a process of partitioning the seemingly incompatibles or irreconcilables into two parts and redefining them in terms stereotypical of the general attitude of the era. What I have sketched so far in the preceding chapters is the American society that should be viewed as an argument culture which depends for its satisfaction upon dichotomy, oftentimes with the winning side claiming "truth." Even in intellectual activity the middle alternatives have often been dismissed. Many people still remain stalwart upholders of dichotomies, whether intelligently conceived or not. Prevalent (as of January, 2009) is the opinion that "anti-intellectualism" has receded (along with George W. Bush) after having dominated the political scene and "intellectualism" has secured an honored position again (along with Barack Obama). "Intellectualism or reason has suffered long in the battle with catchpenny realities or unreason," is nothing but another phase of dichotomy characteristic of the traditional American culture. With the emergence of the Internet, environmentalism and globalism, however, dividing elements categorically into two sharply opposed groups may not be a mental luxury all these people can easily afford. Intellectualism embraces reason, but what we might call "new intellectualism" or "neo-intellectualism" seems to be ready to nurture the potential "truth" of both sides. It may even contribute to an understanding of Emerson's transcendental concern with a dialectic ... not dichotomous ... union of "mind" and "nature," and of Thoreau as "one both knowing and doing."

(15)

THE TENDER-MINDED	THE TOUGH-MINDED
Rationalistic (going by principles) 合理的（原理による）	Empiricist (going by 'facts') 経験論的（事実による）
Intellectualistic　理知的	Sensationalistic　知覚主義的，感覚論的
Idealistic　観念論的	Materialistic　唯物的
Optimistic　楽観的	Pessimistic　悲観的
Religious　宗教的	Irreligious　反宗教的
Free-willist　自由意志的	Fatalistic　運命論的
Monistic　一元論的	Pluralistic　多元論的
Dogmatical　教理主義的	Sceptical　懐疑主義的

HIGHBROW	LOWBROW
The one knowing（知る人）	The one doing（する人）
（Unmitigated）theory（理論（そのもの））	（Unmitigated）practice（実践（そのもの））
Heavenly virtues（高度の人徳）	Mundane virtues（世俗的な人徳）
Transcendent theory（超越理論）	Catchpenny realities（きわもの的現実）
University ethics（大学の倫理）	Business ethics（ビジネス倫理）
Academic pedantry（衒学趣味）	Pavement slang（巷の通語）
Eternal issues（永遠の問題）	Practical issues（現実の問題）
Fastidiousness or aloofness（気難しさまたは超然）	Opportunism（便宜主義）
Infinite inflexibility（徹底した硬直性）	Infinite flexibility（徹底した柔軟性）
Vaporous idealism（むなしい理想主義）	Self-interested practicality（自己本意の現実性）
Stark intellectuality（純然たる知性）	Stark business（純然たるビジネス）
Angry God（怒れる神）	Poor Richard（貧しきリチャード）

3回目になるが，冒頭に，ウィリアム・ジェームズによる「人の気質構造のダイコトミー」を掲げてみた。この章でも，その内容を別な角度から議論することになるからである。また，下のダイコトミーは，ヴァン・ワイク・ブルックスが掲げた対立概念を，筆者の解釈を加えながら，コラム化したものである。基本的には，2人の考え方に大きな違いはない。

「アメリカ人は，ことあるごとに，二項対立法を使って議論したがる，「救われるか，救われないか」という二者択一的なキリスト教倫理の影響を強く受けている，議論社会に特有の“good or evil”（善か悪か）...“right or wrong”（正しいか正しくないか）...“truth or falsehood”（真実であるかないか）といったダイコトミーを使って意見を戦わせる，国民気質を“highbrow vs. lowbrow”（知性の高い人 対 知性の低い人）に分ける動きがある —— 事実であるにせよ誇張であるにせよ，こうした対句法による発想や議論がこの国の人びとの考え方に強い影響を与えてきた」，としたのがこれまでの主な内容である。

“Unmitigated theory vs. unmitigated practicality”（理論そのもの 対 実践そのもの），“transcendent theory vs. catchpenny realities”（超越理論 対 きわもの的現実），“stark intellectuality vs. stark business”（純然たる知性 対 純然たるビジネス），といった対立表現を使ってブルックスがアメリカ社会を捉えようとしていることも取り上げてみた。独立宣言と理神論の関係にも触れた。自然，理性，宗教の一体化が人間社会の倫理に拘束力を持つとする「自然法」と人為的に定められた「実定法」を対照的に議論したのも，その前後であった。ピューリタニズムの持つ完全主義的な“pietism”（敬虔主義）がいくつかの覚醒運動を通して“evangelism”（福音主義）に繋がったこと，啓蒙思想の洗礼を強く受けたキリスト教が Deism（理神論）〜Unitarianism（ユニテアリアニズム）〜Transcendentalism（ニューイングランド超越主義）の流れを作ったこと，そうした啓蒙思想を生み出した「理性」の前に「神」が少しずつ「奥に引っ込んだ」こと，理神論やニューイングランド超越主義は，やがて登場する大きなリベラリズムの中で，その影を次第に薄くしていったこと，そうした諸々の社会現象にも触

れてきた。

さらに，前章では，myth and/or reality を faith and/or reason と絡め，聖書やスタインベックの *America and Americans* からの引用を繰り返しながら「パラドックスと夢」の議論を進めた。現在では，「福音派（保守派）」と「リベラル派」がアメリカ人の考え方を大きく二分しているが，どちらもピューリタニズムに，その源流を辿ることができる，とも仮定してみた。一部の人たちが主張するほどシヴィル（国民）宗教が確立しているわけではない ... 所詮，アメリカ合衆国はキリスト教国である，とし，アメリカ文化全体にわたるキリスト教の影響について多くのページを割いてきた。

この章では，こうした議論をもとに，“intellectualism”（理知主義）と “anti-intellectualism”（反理知主義）を新しいダイコトミーとして取り上げてみたい。結論は，“anti-intellectualism” が “intellectualism” に取り込まれる可能性である。その可能性を持つと思われる “intellectualism” を，あえて “neo-intellectualism”（新理知主義）と呼ぶことにしたい。ジェームズの “intellectualism” は “sensationalism” に対立し，ブルックスの “intellectuality” は “business” と向かい合うからである。“Neo-intellectualism” は，「市場原理」が中心の「経済自由主義」を意味する “neo-liberalism” または “neo-conservatism”（新保守主義）に対する単なることば上の筆者の反動である。

アメリカ合衆国は，もともと，「救い」と「豊かさ」を求めた人びとが移住して始まった国である。1607 年のジェームズタウン，1620 年のプリマス，それぞれの植民地以来，長いあいだ，この求めが立ち消えたことはなかった。「救われ」ても「豊かさ」を求め，「豊か」になっても「救い」を追った。その双方が手に入ったと実感できた人たちにとってアメリカ合衆国は「エルドラド」となり「約束された土地」となったのである。「豊かさ」と「救い」は「自己信頼」への傾斜も促した。「救い」を説く覚醒運動が繰り返し登場する一方，リベラルで現実的な考え方がその力を増していった。伝統に捉われないで済むアメリカのリベラリズムは，ヨーロッパの啓蒙思想の影響を強く受けながら，こうした「救い」と「豊かさ」の上に登場していったのである。フロンティアの存在もその動きを加速した。企業におけるアントレプレナーシップも盛んになった。

学問や思想もリベラリズムの産物であった。あらゆる分野が学問や思想の対象となっていったのである。人文科学の分野ではリベラルなアプローチが目立った。文学，言語，歴史，（数学），哲学，芸術が人文科学を構成し観察や実験を基盤とする自然科学と向かい合ったのである。

もともと，“humanities”（人文科学）と “sciences”（自然科学）の間には一種の「対立」がある。研究の対象が異なるだけではない。“Speculation”（推論）を使う回数が多いか観察や実験などに頼る回数が多いか，の点でも差がある。合理論は “intellectualism” に従い，経験論は “sensationalism” を追う。伝統的には，“intellectualism” は「個々の事実の抽象化」を通して「本質」に迫ろうとする考え方である。そのため，“intellectualism” は「抽象論」，「合理論」と結びつける方が理解し易いことになる。しかし，それだけではない。

「人文科学」は合理論を重んじる THE TENDER-MINDED に属し，「自然科学」は 経験論を主体とする THE TOUGH-MINDED に属する，とすれば確かに分かり易いが，それがすべてではない。いくつかの個々に得られた事実を統括したり概念化したり，場合によっては，断定的に定義したりすることも “intellectualism” の分野である。ジェームズタウンへの動機が THE TOUGH-MINDED に属し，プリマスへのきっかけが THE TENDER-MINDED であったとしても，あながち的外れだ

とはいえない。

類別化が正しかったどうか，概念や断定的な定義が，そこに包摂されているものにとって適切かどうか ... 多少の差はあっても，それを確認するのは“intelligence”（知力，判断力）を含む“intellect”（知性）である。もともと帰納と演繹が絶えず交錯するのが学問である。利用する人の気質や心理的動因も片方にとどまらない。個々の具体的な事実から一般的な命題や法則を導き出すことも，一般的な原理から個々の事実を理解したり説明したりするのも“intelligence”を使いこなす“intellect”である。冒頭に掲げたジェームズのダイコトミーに載る唯物論を仕上げるのも世にいう“scepticism”を支えるのも“intellect”であって“sensation”ではない。

ウィリアム・ジェームズは，*Pragmatism* の中で，“pluralistic monism”（複数的単元論）や“free-will determinism”（自由意志的決定論）や“practical pessimism combined with metaphysical optimism”（形而上学的楽観主義と結びついた現実的悲観主義）といった折衷案を提唱している。Unity（統一）あり，division（分類）あり，そうした variety が実際の人間の世界だ，というのである。プラグマティズムがイギリスの“utilitarianism”（功利主義）の影響を受けているのは事実だが，ジェームズの考えは，ダイコトミーで分けられた二者を融合させようとする案だ，といってさしつかえない。

ジェームズのレクチャー“The Present Dilemma in Philosophy”が活字となって世に出たのが 1907 年，ブルックスが“Highbrow”と“Lowbrow”を *America's Coming-of-Age* の中で主張したのは 1915 年であった。もちろん，“highbrow”という単語を最初に使ったのはブルックスではない。それまでにも，長いこと，「前頭部が広い人」は，骨相学的にみて，“intelligent”（聡明である）とも“intellectual”（知的である）ともいわれてきた。しかし，多くの人が“highbrow”を「高い知性や頭脳」と連想するようになったのは 19 世紀末である。ジェームズやブルックスが活躍する少し前のことであった。

確かに，2 人のダイコトミーは，西洋人，特に，アメリカ人のものの考え方を理解する上で極めて参考になるが，この章のテーマである“intellectualism（理知主義）vs. anti-intellectualism（反理知主義）”を“rationalism（合理主義）vs. empiricism（経験主義）”の関係で説明するわけにはいかない。“Intellectualism”を“sensationalism（知覚主義）”の対立語として取り扱うのは当然としても，“sensationalism”は，“anti-intellectualism”と異なる点が多いからである。反理知主義が，必ずしも知覚主義を排除するわけではないからである。

“Intellectualism”を単に“reason”の同義語とし，“rationalism”は“reason”を使うことだ，と定義してしまえば，これまで繰り返し議論してきた“reason（理性）vs. faith（信仰）”のダイコトミーが崩れてしまうことになる。それでも，ジェームズの対立コラムでは，“rationalistic”と“intellectualistic”が“religious”と同じ欄に並んでいる。ジェームズが THE TENDER-MINDED の項に，この 3 つを入れたのは，明らかに，伝統的な「精神と物質」の二元論や「演繹法と帰納法」を意識した結果ではないかと思われる。

ブルックスも指摘しているが，アメリカ社会における“intellectualism”は“positive”（肯定的）なものと限らない。“Negative”（否定的）な評価を受けることも多い。逆に，“anti-intellectualism”が“negative”になるとは限らない。“Positive”にもなる。アカデミズムと非アカデミズムが覇を競う社会である。いわゆる「インテリ」は「知性偏重で，非現実的な空想論が多く，饒舌で中身が薄

い」とされ軽蔑的なラベルを貼られることが少なくない。ときには，マッカーシズムの時代のように，狂信的な「異端審問」の標的となり「国家安全の敵」となることもある。

「空想論と現実論」の例としてよく引き合いに出されるのが，1950 年代，民主党大統領候補に指名されたアドレー・E. スチーブンソンとスチーブンソンに勝って第 34 代大統領になったドワイト・D. アイゼンハワーである。Richard Hofstadter によれば，スチーブンソンは「象牙の塔を象徴し能力的にも未知数」とされ，アイゼンハワーは「新聞や書物からではない現実社会から直接得た知識を持っている」とされたのであった。

「インテリ」が「そうでない人たち」を見下げて呼ぶ語には “jerk, dunce, nincompoop, booby, goose, buffoon” など数限りなくある。逆に，「そうでない人たち」は「インテリ」を “bookish”（書物に凝る人）や “egghead”（インテリぶる人）と呼び軽蔑するが，そうした語の数は，それほど多くない。対立はことばの上だけではない。「インテリ」は「精神的にも異常なことが多く」，「傲慢で大衆に合わせようとせず」，「聖書を読まず」，「大衆をコントロールするために自分が信じていない宗教や神を押しつけたり利用したりする」のである。

興味深いことに，アメリカ社会の “lowbrow” な人たちは “highbrow” から蔑まれても自虐的にならない。ときには，皮肉や風刺を使って対抗する。“Erudite”（学究的な）も “pedantic”（学者ぶった）も “academic elitism”（学問的エリート主義）も，その「権威」に対抗するために，“lowbrow” があえて使う “satirical”（風刺的）な表現である。「開き直り」というよりも，「非現実的な理知主義」を皮肉ることによって，自己の存在や “identity”（主体性）を確認するのである。アメリカ合衆国では，「ビジネス倫理」や「きわもの的現実主義」が成功した実務の流れを作り出し大学を中心とする「アカデミズム」に十分対抗できた，といってもさしつかえない。

“Intellectual” は日本語の「インテリ」に相当するが，形容詞の場合は「理知的な，知的な」であり，名詞の場合は「知性を重んじる人，知性豊かな人，理性的な人」ということになる。当然，「教育レベルが高い人」も「研究職にある人」も “intellectual” である。

“Intellectualistic” は，そうした性格を持つ，ということであり「抽象的，知的な追究を重んじる」という意味が強い。「筋肉労働者階級」と対立する「知識階級」としての「インテリゲンチャ」には，ここでは触れない。アメリカの知識階級は，社会・政治上のエリート階級ではない。「対立」するはずの「労働者・農民・（兵士）」も社会主義国で叫ばれたような「階級闘争」には加わることがなかったからである。

“Intellectual” と似た形容詞に “intelligent” がある。この 2 つは日本人にとって紛らわしい。多くの場合，“intellectual person” が “intelligent person” であることは間違いない。逆に，“intelligent person” が “intellectual person” か，というと，必ずしもそうではない。“Intelligent” は，ふつう，「教育レベルが高い」よりも，「聡明な」，「知能が高い」，「物わかりがよい」，「理解力が優れる」，「教えたことを覚える」といった意味になる。そのため，“intelligent animal” は可能だが，“intellectual animal” は，ふつう，存在しない。また，“intellectual history”（知性の歴史）は「人のイデアや知性を扱った歴史」であって，“intelligent history”（賢い歴史）は「歴史そのものが聡明である」ことになってしまい，その意味でこの表現が使われることは，まずない。

“Intellectualism” の形容詞である “intellectualistic” は，あくまでも「理知主義的な」の意味で，

“rationalistic, idealistic, free-willist” と軌をほぼ同じくする。“Optimistic, religious, monistic, dogmatical” は付随的にオーヴァラップすることがあっても，それ以上のことはない。

繰り返すことになるが，“intellectual” とは「“abstract” な思考ができる」ことである。“Abstract” を単に「抽象的な」と訳すだけでは，その本質は分からない。「抽象化」には，「概念化する，原則化する，法則化する」作業や「概念を導き出す」プロセスが含まれなければならない。「イデアとしての概念を提供したり，共通内容を把握したり，個々の事実をまとめ上げたりする」意味を持つといってもよい。「徹底した理性・合理性」を使った議論の経験がない日本人は「抽象的な」を「漠然的な」と解釈して終わることが多い。「具体的な」を肯定的で建設的なものとし「抽象的な」を否定的で非建設的なものにしてしまう。ダイコトミーを使った議論が少ない日本では，こうした「ことば」の定義も徹底しない。

「抽象」を「個々の事物の性質から共通の要因を抜き出すこと」とすれば，それをするには「ことば」に頼るほかない。因みに，「イデア」にしても「数学」にしても「ことば」を使った抽象である。別な言い方をすれば，イデアも数学も “intellect” の所産である。人以外の動物にはイデアも数学も存在しない。高等哺乳動物が経験や訓練を通して教えられたことに初歩的な反応を示すことはあっても，真偽・善悪・美醜の判断，法則や普遍，方程式を考えたりすることは不可能である。「生」を考え「死」を怖れるのも人間しかいない。文字を使って互いにコミュニケーションをしたり，0 から 9 までの数字を使ってすべての数の概念を表わすことを考えるのも人間だけである。「抽象概念」を伝える「ことば」を持たない動物が “intellectual life”（知的生活）を送ることはない。

「抽象化」,「概念化」,「法則化」を「ロゴス」とすれば，ロゴスも “intellection”（知性を使うこと）の所産であって，それ以外のなにものでもない。“Intellection” の能力を持つ人間がロゴスを語るのである。ロゴスを徹底すればするほど，「奥に追いやられた神」は，ますます人の知性から遠ざかる。さらに “intellection” を強めたければ，神を「究極」とする以外にない。そうなると理性と信仰の間に矛盾はなくなる。神を「究極」とする定義は敬虔な信者でなくても理解し易い。「究極」は「最高の普遍」であり，それ以外のことばを超越する。神を存在せしめながら “intellect” は THE TOUGH-MINDED に対応できるのである。

ジェームズの指摘をまつまでもなく，“intellectualism” と “sensationalism” は，長いこと，西洋における思考方法のダイコトミーを構築してきた。“Intellectualism” は神をも対象にした合理思考を促進し，“sensationalism” は唯物的科学思考に寄与してきたのである。神をも合理化する “intellectualism” は，結局，敬虔な人たちによって “atheism”（無神論）と結びつけられるようになる。その結果，“intellectualism” に対立する “anti-intellectualism” の積極的な解釈の中に「敬虔論」や「福音主義」が加わることになったのである。

“Sensationalism” は “sense perception”（知覚認識）を基本とする一種の “non-intellectualism”（非理知主義）である。そこで，“intellectualism vs. anti-intellectualism/non-intellectualism” とすれば，そのダイコトミーは ジェームズとブルックス双方のダイコトミーを含むことになる。ホッフスタッターの考えも取り入れたことになる。“THE TOUGH-MINDED” も “Lowbrow” も説明できる。

ここで “neo-intellectualism” を “the way of reasoning liberated from institutions, traditions,

dogmas or accepted ideas”（制度・伝統・ドグマ・広く是認されている考えに捉われない推論方法）とすることにしたい。一つの問題に対し「できるだけ多くの可能性を考え，多角的なアプローチをし，合理的な結論を出す態度」が，ここでいう新理知主義である。“Intellectualism”の対立語を“anti-intellectualism”とすることが ホッフスタッターを始めとする 1960 年代以降の際立った傾向であるが，今述べたように，“non-intellectualism”を加えることによって，その意味を広げることが可能になる。いうまでもなく，「反」は「敵対」を積極的に意味する否定語であり，「非」は，ふつう，「無や欠如」を表わす消極的な否定語である。「非理知主義」は「理知の欠如した，または，理知を使わない」とする考え方であって，必ずしも「理知」を攻撃するものではない。

「理知主義」を「反理知主義」や「非理知主義」と対比してみると，今日でも多くの思想家や評論家がダイコトミーを使ってアメリカ社会や文化を説明しようとしていることが分かる。“Non- ”は“anti- ”と同様，攻撃の的になり易い。結局，「福音主義」は「反理知主義」ともされ「非理知主義」ともされるのである。ホッフスタッターは，「近代性への反抗」と題したエッセイの中で「18 世紀から 19 世紀にかけて，アメリカ合衆国では，理神論，ロマンティシズム，宗教的無関心や反宗教，さらに，合理論までもが福音派の敵となった」という趣旨のことを述べている。ここでは，福音派を批判する人たちを，あえて，リベラル派と呼んできた。

繰り返すことになるが，“intellectualism”は，本来，「究極を目指す普遍や本質に関する知識は純粋理性から得られる」とする考え方である。情緒，感情，経験，伝統，制度，組織，myth（思い込み，神話）をできるだけ排除する。しかし，ここでいう“neo-intellectualism”は，その多くを超越する。すべて可能な選択肢を考慮する。「自然の法は神の法であり，すべて啓示されたものである」とする敬虔論も「神の法は自然の法であり，自然を知ることは神に近づくことである」とする理神論も選択肢である。「合理論」も「経験論」も，「観念論」も「唯物論」も，「大学の倫理」も「ビジネス倫理」も，「知る人」も「する人」も，これまでの“intellectualism”も“anti-intellectualism”も，すべて可能なものは取り込むのである。

論理的な思考を通して，ものごとの本質を追究することが「哲学する」こととすれば，経験や事実の合理的な根拠を探ることも「哲学」である。古代ギリシャにおける「哲学」の原形は「自然現象を研究し調査すること」であった。Physics（自然学）が，今日，「物理学」となり second philosophy として扱われるのをみても，「哲学」は，かつて，THE TOUGH-MINDED に属していたことになる。それが，のちに，THE TENDER-MINDED に大挙して移動していったのは，first philosophy が「感覚を超えて存在する不変の本質」を追究し始めたからである。「すべてほかのものの存在の起因となる実体」を追うようになったからである。

「感覚の対象となる外的自然を超えた存在」を追究すれば metaphysics（形而上学）である。前述のように，metaphysics が，1. epistemology（認識論），2. ontology（存在論，本体論），3. cosmology（宇宙の起源・構造・特質や宇宙と時空の関係を研究する学問）から成るとすれば，first philosophy と同様に，「究極の神」による genesis（存在の起源，創世記）との接点が出てくる。“Intellection”の対象である。

丘に登る，川に遊ぶ，平原を見渡す，花があれば，それを，そのままの自然の中で愛でる，森や林の木々に季節の移り変わりを感じる，星を眺め果てしない宇宙に思いを馳せ，あらためて，己の人生を振り返る，“spontaneous”（自発的）な感応の世界に身を置き直観的に「神」を知る。それは

“intellection”，言い換えれば，「理性」の世界である。そこに「理性を通して自然の中に神を見る」エマソンのロマンティシズムがある。THE TOUGH-MINDED の世界を THE TENDER-MINDED の世界を通して眺めてみることである。自然との一体感・充足感は，そこにしかない。結局，最後の「癒し」は，そこにしかない。

“Physical”（形而下の自然）は“material”（物）であり“natural”（自然）である。本来ならば，“mental”（心），“spiritual”（精神），“moral”（倫理）な世界と対立する。“Metaphysical”（形而上の）は“supersensible”（超感覚）であり，“transcendental”（超越）である。汎神論を匂わせるエマソンの“immanentism”（内在論）は，ここにある。エマソンのいう“transcendentalism”であり「己が超越し内在する神を捉えること」である。形而下の世界を形而上の世界に引き上げて見ることでもある。エマソンが，“intellectualism”の洗礼を受けていない「福音思想」に満足できなかったのは，この点にあった。

感覚によって捉えられる“external facts”（外部の事実），言い換えれば，physical facts（物理的な事実）は，結局，究極のものではない。外部の事実や物理的な事実を感覚的に捉えても，それは，かりそめであり，常に変更や訂正を受け入れる状態になければならない。THE TOUGH-MINDED のコラムに“pluralistic”（多元論的）や“sceptical”（懐疑的）が載るのは，そのためである。しかし，これらは，新理知主義の属性でもある。

エマソンの自然は，美の世界であり知の世界であり己を知る世界である。「コンコードの詩人・哲人」は，どこまでも“intellectual”である。“Idealistic”（理想主義的）で，“monistic”（一元的）で，“dogmatical”（教理的）でもある。エマソンがジョナサン・エドワーズに似ているとすれば，こうした“stark intellectuality”のためであり，ベンジャミン・フランクリンの現実主義にはないロマンの世界である。この「詩人・哲人」にとってコンコードの林や森は「統一概念」を知り「神」を知る舞台なのである。

英語でいう“law”を日本語に置き換えると「法，法律，法則，条例，きまり，ならわし，原則，律法，戒律，天啓，啓示」となる。「法，法律，条例，きまり，ならわし，原則」は修正も変更も可能である。人の思索で得られる「仮説」と同域にあるからである。ところが，後半の「律法，戒律，天啓，啓示」は修正も変更もできない。上から与えられるものであり，final（最終，究極）である。そのまま受ける以外にない。事実上は人の思索の産物であったにせよ，解釈の変更は調整の範囲にとどまる。たとえ調整の範囲を超えることがあっても，それを「修正」・「変更」と称することはない。厄介なのは，自然に存在するものも，神が作ったものも人間が考え出したものも，こうした“きまり”は一つの単語“law”で処理されることである。帰納法で生まれた法が演繹法で適用される場合は修正・変更の可能性もあるが，イデアの世界からの一方的な演繹法で適用される“law”は，あくまでも“dogmatical”である。旧約聖書のモーゼ五書や福音による新約聖書の“教え”の部分も“dogmatical”な「きまり」である。

“Neo-intellectualism”は，こうしたドグマも排除しない。“Dogmatical”が福音的で“anti-intellectualism”であっても，THE TENDER-MINDED や HIGHBROW で処理する。“Infinite flexibility”の世界である。それは，新しい解釈を加えたプラグマティズムであり，新しい“idealism”（理想主義）であり，多元的ロマンティシズムである。

ダイコトミーは，ことばによる。そこで使われた対立事項が，しばしば，ステレオタイプ化した「ことば」で再定義される。再定義された「ことば」による議論が新たなダイコトミーを生む。ダイコトミーは，政治・経済・外交だけでなく人びとの世界観や価値観にも大きな影響を与えてきた。19世紀，アメリカ合衆国が，その「領土を大西洋から太平洋に至るまで拡大する使命を神から与えられた」とし，それを“Manifest Destiny”（明白なる運命）と呼んだのも，その一例である。その内容は「大西洋から太平洋に至るまで領土を拡張し，その政治的，経済的，社会的理想をもって，そこにいる劣等民族を洗脳する義務を神から負っているとする主張」であったが，それは，やがて，太平洋にも拡張されていく。新しい定義に酔い，それを行動に移す。「神から与えられた使命」としても，これはリベラルな理知主義ではない。反理知か非理知に属する。

ブルックスによれば，“the one knowing”（知る人）と“the other doing”（する人）の間には“incompatibility”（非両立性）や“irreconcilability”（対立性）が存在し調和することはない。両者の間には，ときには，ことばが育む敵対心さえも生じる。敬虔論が残るところでは“heavenly virtues”（高度の人徳）が栄え，そうでないところでは“mundane virtues”（世俗的な人徳）が世相を風靡する。“Academic pedantry”（衒学趣味）と“pavement slang”（巷の通語）の間には共通のグラウンドがない。豊かなビジネス社会にあって「肉体を使って働いている人」からみれば“intellectual”や“egghead”（インテリぶる人）は「他人が生み出す富に依存する存在」でしかない。

繰り返すことになるが，“Highbrow,”“Lowbrow”の表現は19世紀の後半から，“anti-intellectualism”という語は20世紀の後半から目立つようになった。ジェームズ・T. アダムズのいう“business civilization”（ビジネス文明）が登場し，やがて，アメリカ社会を席巻したころである。ビジネスが成功すれば，“Highbrow”に属する人びとは「自ら汗を流さない，レトリックをもてあそぶ人」である。敬虔論者からみれば「救われることのない無神論者」である。“Populism”（人民主義）の社会にあっては「傲慢なエリート主義者」である。

結局，ウィリアム・ジェームズが説くプラグマティズムも，「可能性を複合的に探る」という意味では，新しい“neo-intellectualism”に属することになる。“Intellectualism”と“anti-intellectualism”の関係は文化・思想における“liberalism”と“anti-liberalism”の関係に近い。議論やディベイトを重んじてきたアメリカ社会では，こうしたダイコトミーを使った対立概念が絶えず利用されてきた。概念が明確でないものにはレトリックを使った新しい定義が与えられ，対立意識が，いっそう煽られた。それでも，「理知主義」は「観念的にリベラル」であったがために「価値観の多様化」や「知的好奇心」を促す結果となったのである。

2009年に登場する「オバマ政権」を“intellectual”とし，それまでの「ブッシュ政権」を“anti-intellectual”とする動きが目立つ。それは「ブッシュ政権」が「観念的にリベラル」ではなかったためである。オバマ氏が属する民主党政権が常に“intellectual”で共和党政権が“anti-intellectual”であった，というわけではない。具体的には，「ブッシュ政権」のビジネス倫理や福音的な宗教ドグマが“anti-intellectual”とされたのである。アメリカの経済政策は，長いあいだ，「新自由主義」を掲げた「小さな政府」論とケインズ的な「大きな政府」論のせめぎ合いが展開してきた。「ブッシュ政権」は前者で，「オバマ政権」は「機能する政府」を掲げ，いずれにもこだわらない姿勢を貫こう

としている。

21 世紀を迎え，「目先だけの現実主義」を捨て「地球上の環境問題や生態系問題を総合的に考えていく」ことが先進国の趨勢となってきた。インターネットやグローバリズム意識の登場もある。理想的な抽象概念を追う「理知主義」か「現実主義」を標榜する「反理知主義」か，それとも，その両者を抱き込み，あらゆる選択肢を考える“neo-intellectualism”（新理知主義）と呼ぶべきものか ... “pluralism”や“skepticism”を受け入れる“intellectualism”は，ジェームズやブルックスのダイコトミーに新しい解釈を加え穏やかな“neo-intellectualism”となろうとしている。「新理知主義」は，これまでの「新自由主義」や「新保守主義」の一部も抱きかかえる可能性がある。

“Sensationalism”や“materialism”を“intellectualism”や“idealism”で包み込もうとする経験は，これが初めてではない。政治にとっては新しい試みかもしれないが，アメリカの啓蒙思想としてはすでに存在していた。エマソンやソーローは，19 世紀の前半に「理性や知性で捉える自然観」を紹介している。「ことば」は，すべてを語らない。人は，必ずしも，「ことば」を必要としない。超越すれば，人は 直観的・根源的・感性的・持続的な存在となり得る。エマソンやソーローは，自然の美しさにあって，それを語り伝えている。「ことば」を超えた「精神」と「自然」の融和である。「神」は「福音」を批判する理性や知性の中にも存在するようになる。“Neo-intellectualism”は“evangelism”（福音主義）も従来のリベラリズムも超えた「知的新プラグマティズム」になるかもしれない。

References

The Holy Bible, The King James Version, American Bible Society

The Holy Bible New Testament, New King James Version, Thomas Nelson, Inc., 1983

Van Wyck Brooks, *America's Coming-of-Age*, E. P. Dutton & Co., Inc., 1958

William James, *Pragmatism and Four Essays from The American Truth*, New American Library, 1974

William James, *Pragmatism*, Dover Publications, Inc., 1995

J. Hector St. John de Crèvecoeur, *Letters from an American Farmer and Sketches of Eighteenth-Century America*, 1963

Darrett B. Rutman, *American Puritanism Faith and Practice*, J. B. Lippincott Company, 1970

Alexis de Tocqueville, *Democracy in America*, The New American Library, 1956

John Steinbeck, *America and Americans*, The Viking Press, Inc., 1966

John Dewey, *How We Think*, Dover Publications, Inc., 1997

John Dewey, *Human Nature and Conduct*, The Modern Library, Random House, Inc., 1957

Michael Redhead, *From Physics to Metaphysics*, Cambridge University Press, 1995

Max Lerner, *America as a Civilization* I, II, A Clarion Book, Simon and Schuster, 1957

James Truslow Adams, *The Epic of America*, Blue Ribbon Books, Inc., 1931

James Truslow Adams, *Our Business Civilization*, AMS Press, 1969

John Cottingham (Edited), *Western Philosophy An Anthology*, Blackwell Publishing, 2008

Bertrand Russell, *History of Western Philosophy*, Routledge, 2002

Ralph Waldo Emerson, *Emerson's Essays*, Thomas Y. Crowell Company, 1951

Bliss Perry (Edited), *The Heart of Emerson's Journals*, Houghton Mifflin Company, 1914

Steven E. Whicher, *Selections from Ralph Waldo Emerson*, Houghton Mifflin Company, 1960

Ralph Waldo Emerson, *The Essays of Ralph Waldo Emerson*, Random House Inc., 1944

Van Wyck Brooks, *The Life of Emerson*, The Literary Guild, 1932

Nina Baym (General Editor), *The Norton Anthology of American Literature*, I, II, W・W・Norton & Company, 1979

Richard Hofstadter, *Anti-intellectualism in American Life*, Vintage Books, 1962

J. Bronowski & Bruce Mazlish, *The Western Intellectual Tradition from Leonardo to Hegel*, Harper Perennial, 1960

（こざわ　ひろゆき　　英語コミュニケーション学科）